

発表要旨

〈研究発表〉第Ⅰ会場

言論人としての国分青厓

— 仙台進取社時代を中心に —

千葉 有斐

国分青厓（一八五七・一九四四）、名は高胤、字は子美、青厓はその号、また太白山人と称す。通称豁。奥州仙台の人。司法省法学校同期の陸羯南主筆の新聞『日本』の評林欄に時事を諷した漢詩を連載した。この為、同紙は政府の不興を買い、発行停止を被ること数十回に及んだが、青厓の名はこの「評林」詩によって広く天下の知る所となり、明治大正昭和の三代に亘り、漢詩界の一大宗として著れた。帝国芸術院会員。著作に『詩董孤』がある。

右は、多くの人名辞典が記載する所の青厓の略伝であるが、かかる評価を受けながら先行研究はまことに寥々たるものであり、僅かに木下彪氏（一九〇二—一九九九、元宮内省御用掛・岡山大教授）が雑誌『師と友』に連載した「国分青厓と明治大正昭和の漢詩界」があるのみである。

本発表は国分青厓が明治十三年から十五年頃まで関係していた民権結社仙台進取社の機関紙『進取雑誌』に発表した論文「制法論」をはじめとして、青厓が関係した新聞、雑誌の漢詩や記事を時代背景や郷土史の研究成果に留意しつつ、年代順に追っていくことで、その一貫した言論の姿勢を見出し、漢詩人としてではなく、言論人としての国分青厓を考察する。

『管子』八類の「管子解」類について

有永 真瑞

『管子』は、八類と呼称される「經言、外言、内言、短語、区言、雜篇、管子解、管子輕重」の八区分、全八十六篇から成る先秦諸子の思想書である。春秋時代・斉の管仲の著作であると伝承されてきたものの、その内容が管仲の手によって著されたものではないことは唐末から宋初にかけて盛んに指摘されてきた。さらに、版本の状態や成立年代が明確に判明していないことから、『管子』は先秦諸子の文献の中でも特に難読の書とされてきた。

その中でも、八類の一つである「管子解」類は、主に「經言」類

の原文に対応して註を為すという形で構成され、ひとまずは『管子』の中で最も新しく成立したとみなしうるものである。さらに、本文の註の形を取る以上、「管子解」類成立当時に『管子』を理解することを目的としてなされたことは疑いようがない。

そこで、本発表では、八類の中の「管子解」類を主題として検討する。たとえ現在の『管子』が前漢当時の『管子』からその文体や内容が変化して、それぞれが意味するところも変わっていったとしても、その思想を把握することで、『管子』の思想を「管子解」類がどう捉えていたかを考察することが可能になると考えられる。

〈研究発表〉 第Ⅱ会場

小説『それから』と映画『それから』（1985）

の比較―作品を翻案するということ―

郡 裕子

漱石作品は死後百年経った今でも愛読され親しまれ、既に数多く論じられてきた。それは研究論文など活字媒体のものに留まらず、小説を映像化した作品も監督による解釈の表現だと捉えられる。

本発表で扱う主演松田優作、監督森田芳光の『それから』（1985）では代助と三千代の恋愛に主軸を置いて描かれているようである。それは作中で流れることが少ない音楽の使い方や、小説とは違う描写などから窺うことができる。しかし、小説『それから』は恋愛小説として読むことは可能だろうか。小説『それから』と映画『それから』では媒体による表現の違いはもちろん、時代の隔たりも大きく世の中の価値観も違う。作品が別媒体・別言語に翻訳・翻案された時にこそその違いが明らかになり、また、普遍的なものや求められているものが見えてくるのではないか。

今回は小説『それから』が映画『それから』ではどう翻案され、どのような解釈がなされているのかを論じたうえで、翻案を考察し

て論じる意義を提示したい。

坂口安吾『明治開化安吾捕物帖』論

―「謎解きゲーム」の形式性と歴史の固有性―

檜山 麗

『明治開化安吾捕物帖』は、一九五〇年十月から一九五二年八月までにわたり「小説新潮」にて連載された。『明治開化安吾捕物帖』にて取り上げられる時代は明治十八、九年の開化期。安吾が「勝夢酔」にて「維新後の三十年ぐらいと、今後の敗戦後の七年とは甚だ似ているようだ」と述べていることから、先行研究では文明批評的な性格に重点を置いたものが多かった。一方で安吾は『私の探偵小説論』にて「私は探偵小説をゲームと解している」と述べているため、形式面から「謎解きゲーム」としての『明治開化安吾捕物帖』を捉える必要もあると考える。物語の形式は最後まで同じものが保たれず、話数が進むにつれ変化していく。安吾の他作品にも共通性が見られるか確認しつつ、二年の連載期間中に起こった変化、その理由に迫

る。

これまで『明治開化安吾捕物帖』が受けた評価はあまり高いものではなく、論じられることも多くはなかった。本発表では先行研究の文明批評的な性格に形式面での考察も加え、本作が取り上げている時代の固有性との関わりをとらえることを目標とする。

eスポーツにおける「攻略」概念の再構成

―『ストリートファイター』シリーズを題材に―

柴田 拓樹

コンピュータゲームをめぐる近年の動向のなかでも、昨今、盛んに言及されるのが「eスポーツ」である。一九九〇年代後半に登場して以来、ゲームを競技として対戦するそれは、本来なら「スポーツ」ではないにもかかわらず、既存のスポーツを模しながら独自の発展を遂げてきた。そして二〇二二年のアジア競技大会では、eスポーツの正式種目化が決定している。

近年eスポーツのプロゲーマーは日本でも増加傾向にあるが、彼

らがしばしば口にする言葉に「攻略」がある。むろん、攻略本や攻略サイトなどの形態で、特定のゲームの攻略情報を記載した媒体はいつの時代にも存在していた。しかし、それらの前提となる既存の「攻略」イメージと比したときに、eスポーツのプロゲーマーたちは従来とは異なるかたちで当該概念に言及しているように思われる。本発表ではeスポーツの多様な種目のなかでも、とくに対戦格闘ゲームの「攻略」過程をたどりながら、また、マーシャル・マクルーハンや加藤博康らの言説を援用しながら、いかに攻略サイトや配信動画によってゲームをめぐる「状況」が再構成され、それがいかにして「攻略」概念の変容を惹起しつつあるのかを明らかにする。

〈講演〉第I会場

絵のなかの桃源郷

—陶淵明から近代日本へ—

芳賀 徹氏

〔講師紹介〕

芳賀 徹（はが とおる）

一九三一年生まれ。東京大学教養学部教養学科卒、同大学大学院人文科学研究科比較文学比較文化専攻博士課程修了。文学博士（東京大学）。東京大学教養学部教授、プリンストン大学客員研究員、国際日本文化研究センター教授、京都造形芸術大学学長、岡崎市美術館、静岡県立美術館の館長などを経て、現在は国際日本文化研究センター名誉教授、東京大学名誉教授。専門は比較文学。

主な著書に

『大君の使節——幕末日本人の西欧体験』中公新書、一九六八年

『渡辺崋山——優しい旅びと』淡交社、一九七四年（朝日選書、一九八六年）

『明治維新と日本人』講談社学術文庫、一九八〇年

『みだれ髪の系譜』美術公論社、一九八一年（講談社学術文庫、一

九八八年)

『平賀源内』朝日新聞社、一九八一年(朝日選書、一九八九年)サントリー学芸賞

『絵画の領分——近代日本比較文化史研究』朝日新聞社、一九八四年(朝日選書、一九九〇年)大佛次郎賞

『与謝蕪村の小さな世界』中央公論社、一九八六年(中公文庫、一九八八年)

『詩の国 詩人の国』筑摩書房、一九九七年

『詩歌の森へ——日本詩へのいざない』中公新書、二〇〇二年

『藝術の国日本——画文交響』角川学芸出版、二〇一〇年 蓮如賞

『文明としての徳川日本——一六〇三—一八五三年』筑摩書房、二

〇一七年 日本芸術院賞・恩賜賞
など多数。